

## 「新しい嗜好品と価値観や社会的地位に関する調査」 （「ライフスタイルと社会意識に関する調査」）の基礎分析

### 調査概要

「新しい嗜好品と価値観や社会的地位に関する調査」（「ライフスタイルと社会意識に関する調査」）は2019年1～2月に郵送法によって実施された、TASC独自の社会調査である。日本全国に居住し、日本国籍を有する20～69歳の男女4,200名を、層化三段無作為抽出によって選び出し、調査対象者とした。有効回収数は1,565票であり、有効回収率は37.3%であった。

本調査の目的は、新しい嗜好品の摂取状況と、環境保護や健康維持、利他的な志向といったリベラルな価値観や行動の関係性を明らかにすることにある。新しい嗜好品が既存のものとは異なり、他者のまなごしを意識した向社会的な嗜好の表象であり、現代的な価値観を反映した行為類型であることを実証的に示すことを目標とする。また、そうした新しい嗜好品を摂取する人々の社会経済的地位が既存の嗜好品摂取者とは異なっていることを示し、嗜好品とのかかわり方に社会的地位や価値観による差異が反映されていることを実証的に明らかにすることを目標とする。以下では、全変数の度数分布に関する基礎的な調査結果の報告を行う。

### 度数分布

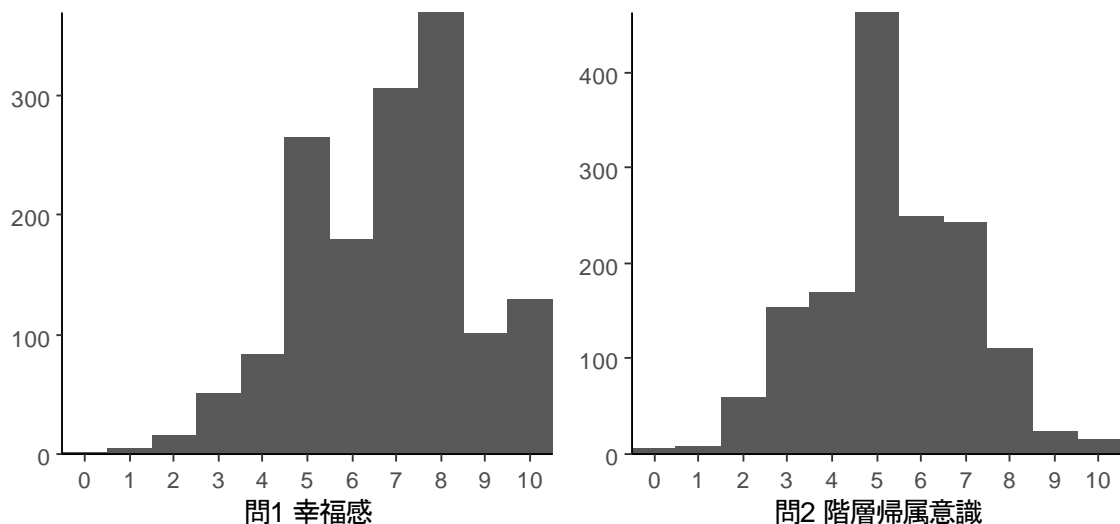


図1. 幸福感・階層帰属意識の分布

調査票は幸福感などの主観的 well-being および階層帰属意識からスタートしている。問1の幸福感と問2の階層帰属意識はともに0～10までの11段階の回答スケールになっており、0が最も不幸・低階層で、10が最も幸福・高階層になっている。幸福感の平均値は6.78であり、中間にあたる5と比較的幸福感の高い8の2カ所にピークができています。一方の階層帰属意識は、平均値が5.35であり、有効回答の30%以上が中間の5に集中する分布になっていた（図1）。

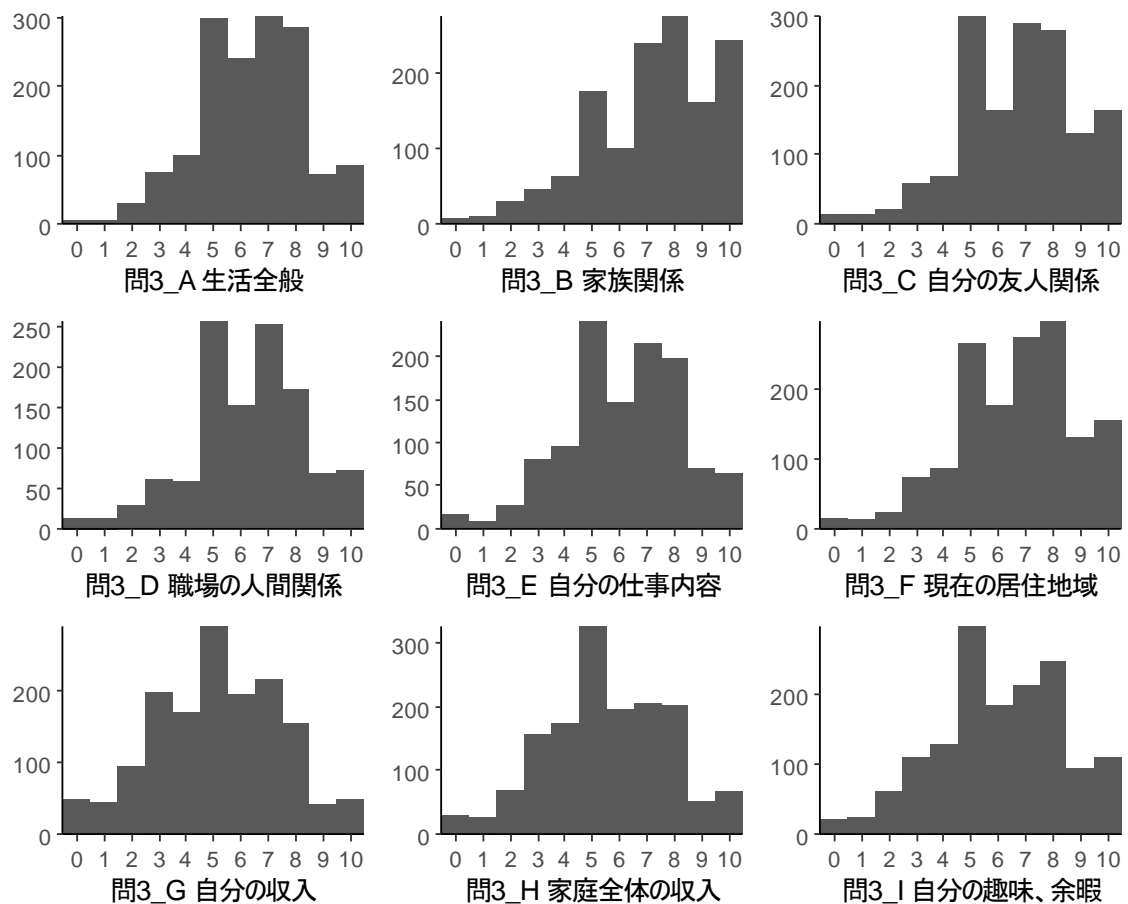


図2. 各種満足度の分布

問3では様々な領域に関する満足度を質問している。これらも回答選択肢は0（とても不満）～10（とても満足）までの11段階である。A\_生活全般に対する満足度は平均値が6.35、回答は5～8に集中している。B\_家族関係に対する満足度は平均値が7.18と高く、7～10の回答が多かった。ただし、家族がいない人は非該当となっている。BほどではないがC\_自分の友人関係に対する満足度も平均値は6.72と高く、5、7、8と回答する人が多かった。9、10という回答も他の項目に比べると多い。D\_職場の人間関係に対する満足度は有職者のみに質問した項目であり、平均値は6.23であり5～8の回答が相対的に多いが、特に5と7に有効回答の内それぞれ20%以上が集中していた。E\_自分の仕事の内容についてもDと同じく有職者のみに回答を求めている。平均値は6.12でこれも5、7、8という回答が相対的に多かった。F\_現在の居住地については平均値が6.64と友人関係に匹敵するほどの値であり、他の項目に比べると9や10の回答も多くみられた。G\_自分の収入については、個人収入が無い人についても回答を求めている。平均値は5.15と各種満足度の中で最も低い。また分布は5を中心とする左右対称の山形の分布を示しており、各種満足度の中では最も正規分布に近い。H\_家庭全体の収入については平均値が5.54であり、回答は5が突出して多いほかは3～8までの各選択肢にほぼ均等に分布している。最後にI\_自分の趣味、余暇の過ごし方については平均値が6.03であり、5～8の間に比較的多くの回答が集まっている（図2）。

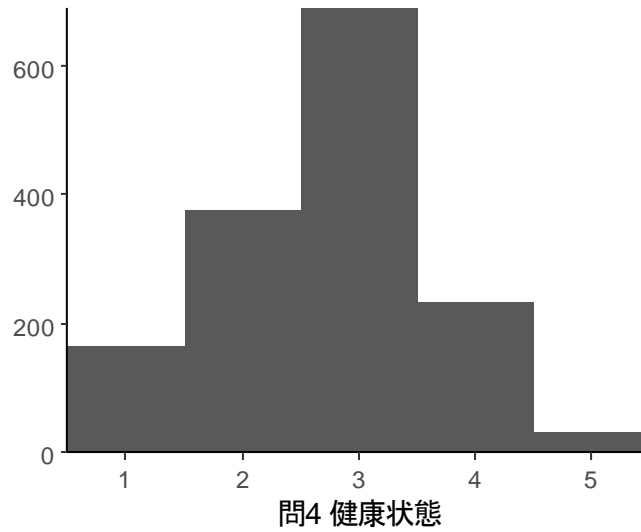


図3. 主観的健康状態の分布

問4では回答者自身の主観的健康状態を尋ねている。選択肢は1（よい）～5（わるい）までの5段階である。平均値は2.72で40%以上の回答者が3（ふつう）と回答した（図3）。

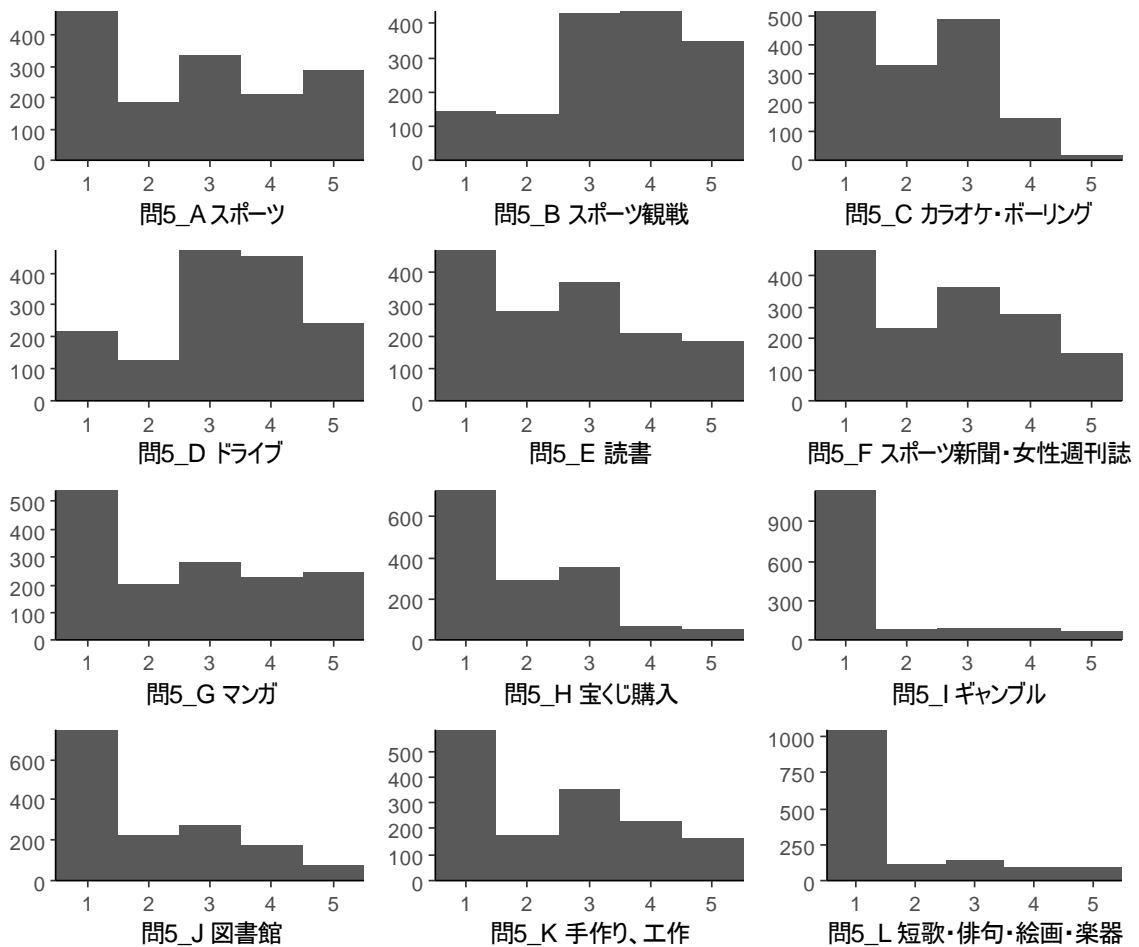


図4. 文化活動の分布 (1)

問5からは様々な文化活動を行う頻度を質問している。問5においては5が週に一回以上、4が月に一回くらい、3が年に一回から数回、2が数年に一回くらい、1が最近五、六年はしたことがないことをそれぞれ意味している。A\_スポーツはどの選択肢にも10%以上の回答があるが、特に最近五、六年はしたことがない人が30%以上と多数を占めている。その一方でB\_スポーツ観戦は数年に一回以上の人80%以上を占めており、スポーツをよくする人よりもスポーツをよく見る人の方が多いことが分かった。C\_カラオケやボーリングをする頻度については、年に数回以下の人が大多数で、有効回答の90%近くを占めていた。D\_ドライブは月に一回から年に一回程度の頻度で行う人が約60%を占めていた。E\_小説や歴史の本については回答が比較的分散しているが、最近五、六年はしたことがない人は30%程度と最も多い。F\_スポーツ新聞や女性週刊誌についても、小説や歴史の本に似た分布になっており、最近五、六年はしたことがない人が30%程度である。G\_マンガについてもE、Fと比較的似た分布である。最近五、六年はしたことがない人が35%程度を占め、その他の回答はほぼ同じ比率である。H\_宝くじの購入については、Cと似た分布をしており年に数回以下の人が90%以上を占めている。I\_パチンコ、麻雀、ギャンブル(競馬など)に行く頻度はさらに極端な分布で、75%以上の人最近五、六年はしたことがないと回答している。その他の回答はどれも同じくらいで、5%かそれよりも少し高い程度であった。J\_図書館に行く頻度はもう少し分散が大きいものの約半数が最近五、六年は行ったことがなく、逆に週一回以上行く人は5%程度に過ぎなかった。K\_パンや菓子の手作り、手芸、園芸、工作をする頻度は比較的分散しており、どちらかといえば読書関連のE~Gに似た分布である。やはり最近五、六年はしたことがない人が比較的多く、40%弱を占めている。問5の最後L\_短歌や俳句を作る、絵をかく、楽器をひく頻度についてはLのギャンブルに近い分布をしている。やはり最近五、六年はしたことがないと回答した人が圧倒的に多く、有効回答の約70%を占めていた(図4)。

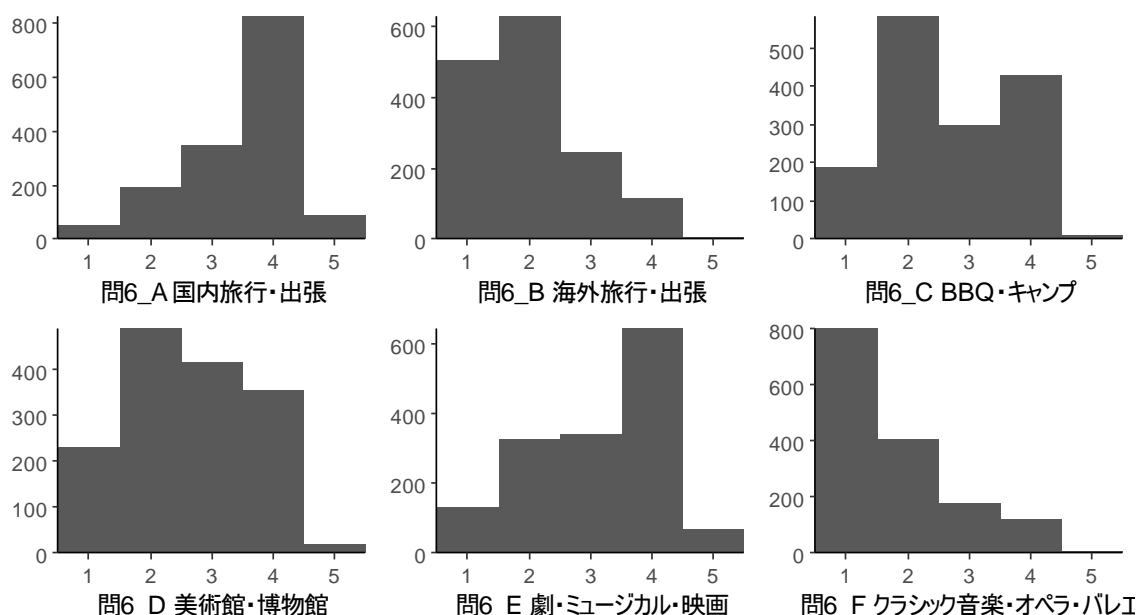


図5. 文化活動の分布 (2)

次の問 6 も問 5 と同様の様々な文化活動の頻度に関する質問であるが、回答の選択肢が異なる。5 が月に一回以上、4 が年に一回から数回、3 が数年に一回くらい、2 が最近五、六年はしたことがない、そして 1 が今まで一度もしたことがないと、問 5 よりも低めの頻度が設定されている。A\_国内旅行、国内出張の頻度については年に一回から数回という回答が半数以上を占めている。国内出張を含めたため、出張を伴う職業の人の回答が集中した可能性も考えられる。B\_海外旅行、海外出張については、30%強を占める今まで一度もしたことがない人と、40%強を占める最近五、六年はしたことがない人の 2 カテゴリに多くが集中している。C\_バーベキュー、キャンプに行く頻度が月に一回以上という人はほとんど見られず、それ以外のカテゴリに分散する形になった。特に多いのは 40%弱を占める最近五、六年はしたことがないという回答だった。D\_美術館や博物館に行く頻度も C と同様に年に数回以下の 4 カテゴリで広く分散しており、それぞれ少なくとも 15%以上の回答がみられた。E\_劇やミュージカルを見たり、映画館に行ったりする頻度は年に一回から数回という人が多く、有効回答の 40%強を占めている。F\_クラシックの音楽界、オペラ、バレエを鑑賞しに行く頻度が少ないカテゴリほど多くの回答が見られ、今まで一度も行ったことがない人が半数以上を占めていた (図 5)。

表 1. 組織参加の分布

	入っている	入っていない
問7#1 自治会・町内会	781 (52.2%)	716 (47.8%)
問7#2 子ども会などの地域組織	182 (12.2%)	1315 (87.8%)
問7#3 PTA	172 (11.5%)	1325 (88.5%)
問7#4 業界団体・同業者団体	95 (6.3%)	1402 (93.7%)
問7#5 労働組合	206 (13.8%)	1291 (86.2%)
問7#6 政治関係	27 (1.8%)	1470 (98.2%)
問7#7 消費生活協同組合	177 (11.8%)	1320 (88.2%)
問7#8 市民運動・消費者運動	7 (0.5%)	1490 (99.5%)
問7#9 ボランティア	84 (5.6%)	1413 (94.4%)
問7#10 宗教	77 (5.1%)	1420 (94.9%)
問7#11 スポーツ関係	233 (15.6%)	1264 (84.4%)
問7#12 趣味の会	166 (11.1%)	1331 (88.9%)
問7#13 学習のためのサークル	60 (4.0%)	1437 (96.0%)
問7#14 自助・相互援助グループ	18 (1.2%)	1479 (98.8%)
問7#15 環境保護団体	12 (0.8%)	1485 (99.2%)
問7#16 その他	37 (2.5%)	1460 (97.5%)
問7#88 何にも入っていない	373 (24.9%)	1124 (75.1%)

問 7 では、複数回答形式で、所属している会や組織をすべて選ぶことを求めている。無回答を除く有効回答の内、どのような会・組織にも入っていない人は 25%弱であり、残る 75%程度は何

かしらの会や組織に加入していることが確認された。中でも多くの人が入っているのは自治会・町内会であり、半数以上の人はこれに入っていた。その他はどれもそれほど多くの人が入っているわけではないが、婦人会・青年団・消防団・老人会・子ども会などの地域組織、PTA、労働組合、消費生活協同組合（生協）、スポーツ関係のグループやクラブ、趣味の会はそれぞれ10%以上の人が、入っていると回答している。逆にほとんど入っていない人がいなかったのは、政治関係の団体や会、市民運動・消費者運動のグループ、自助グループ、相互援助グループ、環境保護団体であった（表1）。

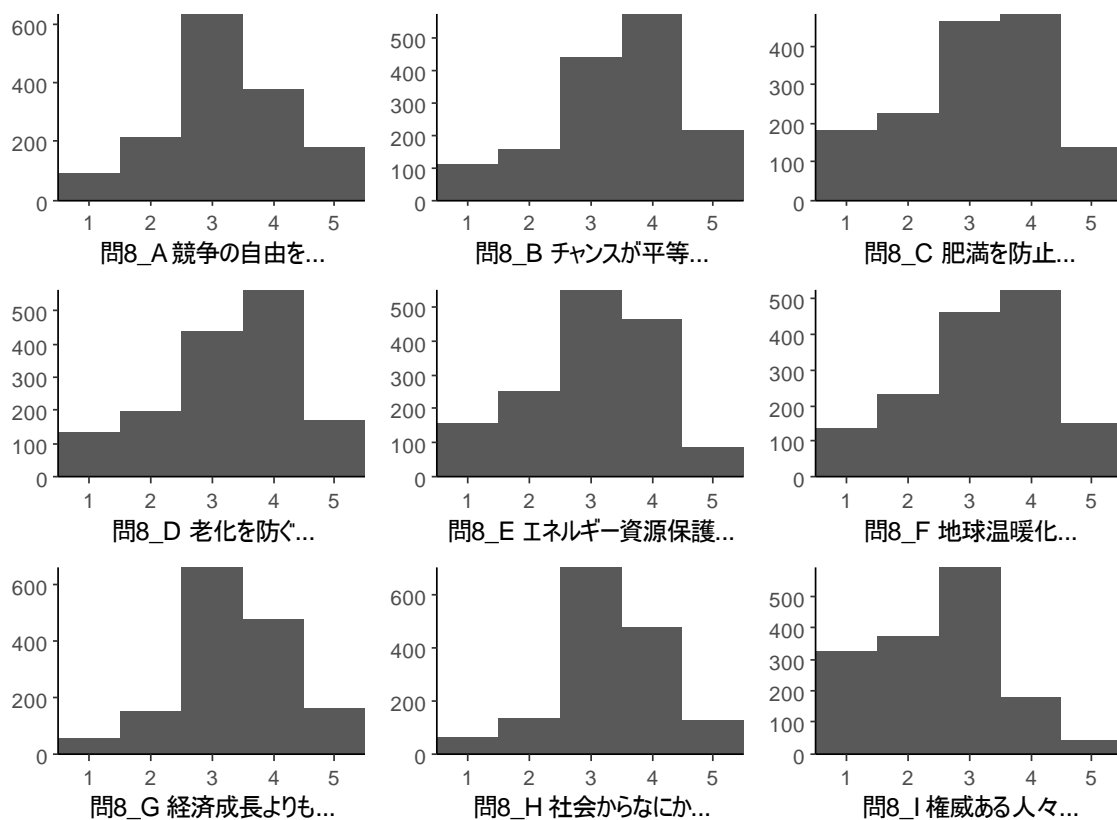


図6. 価値観の分布 (1)

問8では様々な意見に対して、5（そう思う）～1（そう思わない）の5段階で賛否を尋ねている（図6、7）。したがって値が大きいほど、質問文に対して賛成の意見であることを意味する。Aでは「競争の自由をまもるよりも、格差をなくしていくことの方が大切だ」という意見に対する賛否を聞いている。平均値は3.23でと中間に近く、分布をみても3（どちらともいえない）を頂点とする正規分布に近い形になっている。Bの「チャンスが平等に与えられるなら、競争で貧富の差がついてもしかたがない」については平均値が3.42、分布のピークは4（ややそう思う）になっており、やや賛成派が多くなっている。Cでは「肥満を防止するためなら、お金や時間をかけてもかまわない」という健康維持に関する意見であり、平均値は3.11、分布上は3と4に回答が多く集まっている。Dは「老化を防ぐためなら、お金や時間をかけてもかまわない」というややCに類似した質問であるが、平均値は3.29、分布の形状はCよりもむしろBに似て、4（ややそう

思う) が最も多い回答になっている。E「エネルギー資源保護のためなら、便利さや快適さを犠牲にしてもかまわない」とF「地球温暖化やオゾン層破壊を防ぐためなら、便利さや快適さを犠牲にしてもかまわない」、そしてG「これからは経済成長よりも環境保護を重視した政治を行うべきだ」では環境保護に対する考え方を聞いている。E から順位それぞれ平均値は 3.05、3.21、3.37 であり、どれも3 (どちらともいえない)、4 (ややそう思う) に多くの回答があった。H「社会からなにかしてもらいよりも社会のためになにかをしたい」は社会貢献に対する意識といえるだろう。平均値は 3.32 と中間よりも少し賛成寄りであり、3 が最も多く、次いで4が多い分布になっている。I~Lは権威主義的態度に関する項目である。I「権威のある人々にはつねに敬意をはらわなければならない」の平均値は 2.50、J「以前からなされていたやり方を守ることが最上の結果を生む」の平均値は 2.23、K「伝統や習慣にしたがったやり方に疑問を持つ人は、結局は問題をひきおこすことになる」の平均値は 2.46、L「この複雑な世の中で何をすべきか知るいちばんよい方法は、指導者や専門家をたよることである」の平均値は 2.60 である。どれも中間回答よりは2 (ややそう思わない) に寄っている。特にJ「以前から...」については、中間から反対の意見がほとんどであった。

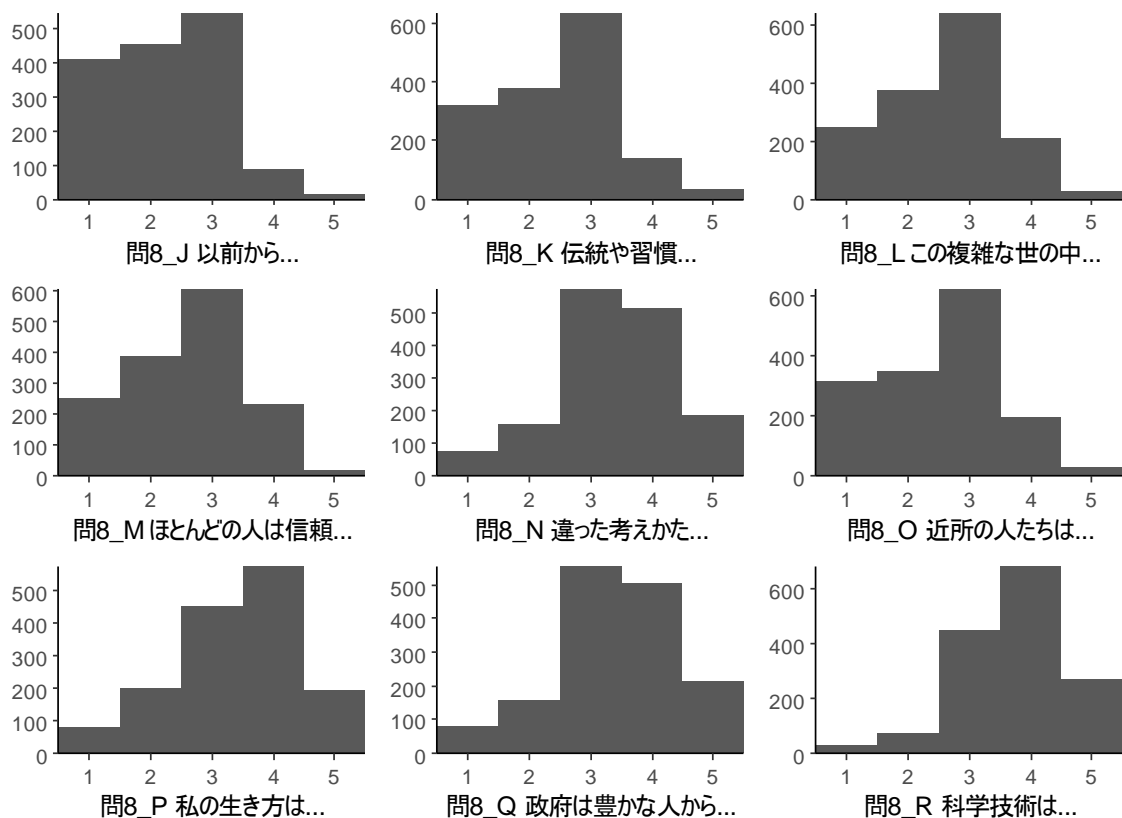


図7. 価値観の分布 (2)

M「一般的にいて、ほとんどの人は信頼できる」に対しては、5 (そう思う) を選んだ人は少なく、1 (そう思わない) や2 (ややそう思わない) を選んだ人が多いが、比較的正規分布に近い分布をしており、平均値は 2.59 である。N「違った考えかたをもった人がたくさんいる方が社会

にとって望ましい」は多様性についての意見であるが、3（どちらともいえない）と4（ややそう思う）に回答は集中し、平均値は3.38であった。Oでは「近所の人たちは強いきずなで結ばれている」かが尋ねられている。賛意を示す回答に比べて、反対を示す回答が多く、平均値は2.52であった。P「私の生き方は、おもに自分の考えで自由に決められる」かどうかを聞く質問で、一般的に主観的自由と呼ばれる。4（ややそう思う）との回答が最も多く、平均値は3.40であった。Qは福祉に対する意見を問う項目で、「政府は豊かな人からの税金を増やしてでも、恵まれない人への福祉を充実させるべきだ」という意見に対する賛否が質問されている。3と4に回答が多く集まっているものの比較的正規分布に近い形状が見られ、平均値は3.41である。最後のR「科学技術は私たちの生活をよりよいものになっている」は科学に対する価値観を問う項目で、賛意を示す回答が多く確認される。平均値は3.7と高い。

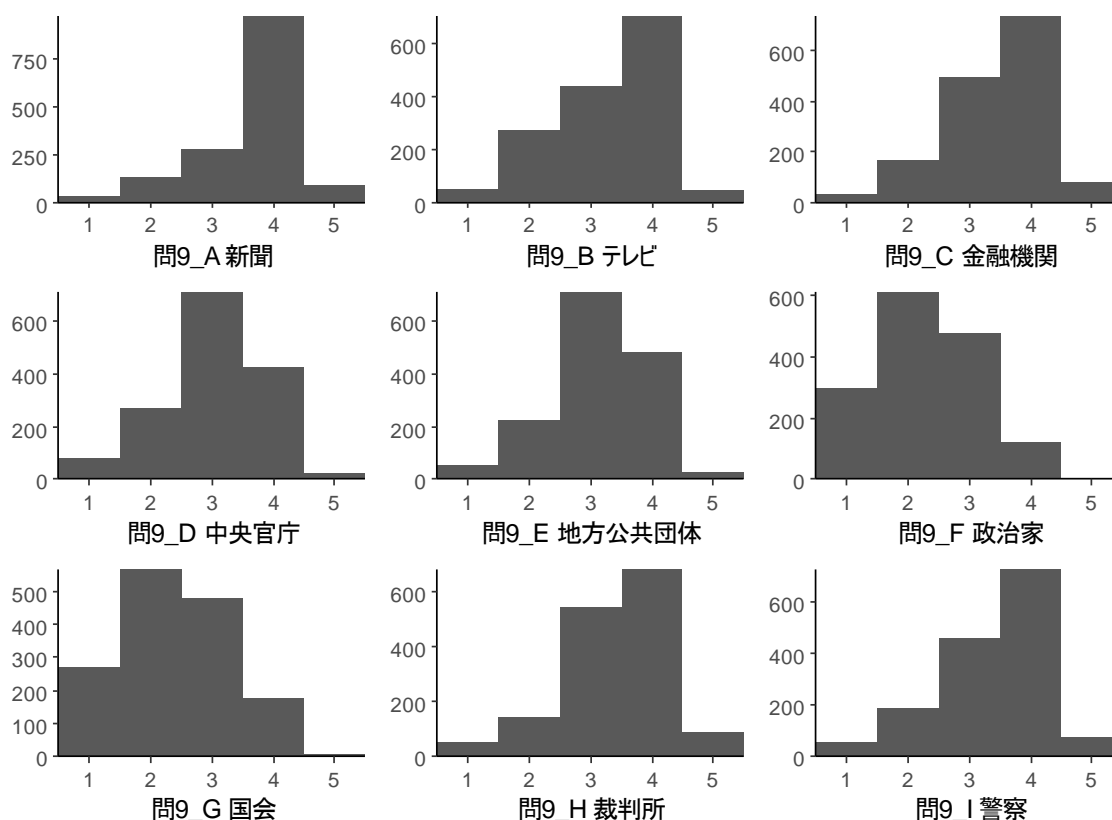


図8. 信頼感の分布 (1)

問9は様々な組織や団体、個人に対する信頼感を尋ねる項目であり、A~Rまでの18の対象について、5（とても信頼している）、4（ある程度信頼している）、3（どちらともいえない）、2（あまり信頼していない）、1（まったく信頼していない）の5段階で回答するように求めている。A\_新聞については4（ある程度信頼している）という回答が圧倒的に多い。B\_テレビについても4の回答が最も多いが、Aに比べると2（あまり信頼していない）や3（どちらともいえない）という回答も一定数見られた。平均値を見てもAの3.64に比べてBの3.27はやや低い。C\_金融機関についてはテレビとほぼ同じ分布をしており、平均値は3.45だった。D\_中央官庁は比較的正規分布



に近い形状をしており、平均値は 3.03 とほぼ中間であった。同様に E\_地方公共団体も似たような分布であり、平均値も 3.13 だった。しかし、F\_政治家および G\_国会に対する信頼感は他の項目に比べて相対的に低く、現代日本における政治に対する不信を反映しているようである。F、G ともに最も多い回答は 2（あまり信頼していない）であり、平均値はそれぞれ 2.28 と 2.39 である。H\_裁判所は 3 と 4 に回答が集中しており、平均値は 3.41 と高めである。I\_警察に対しては裁判所と同様に比較的信頼感が高く、ある程度信頼が半数近くを占め、平均値は 3.38 であった（図 8）。

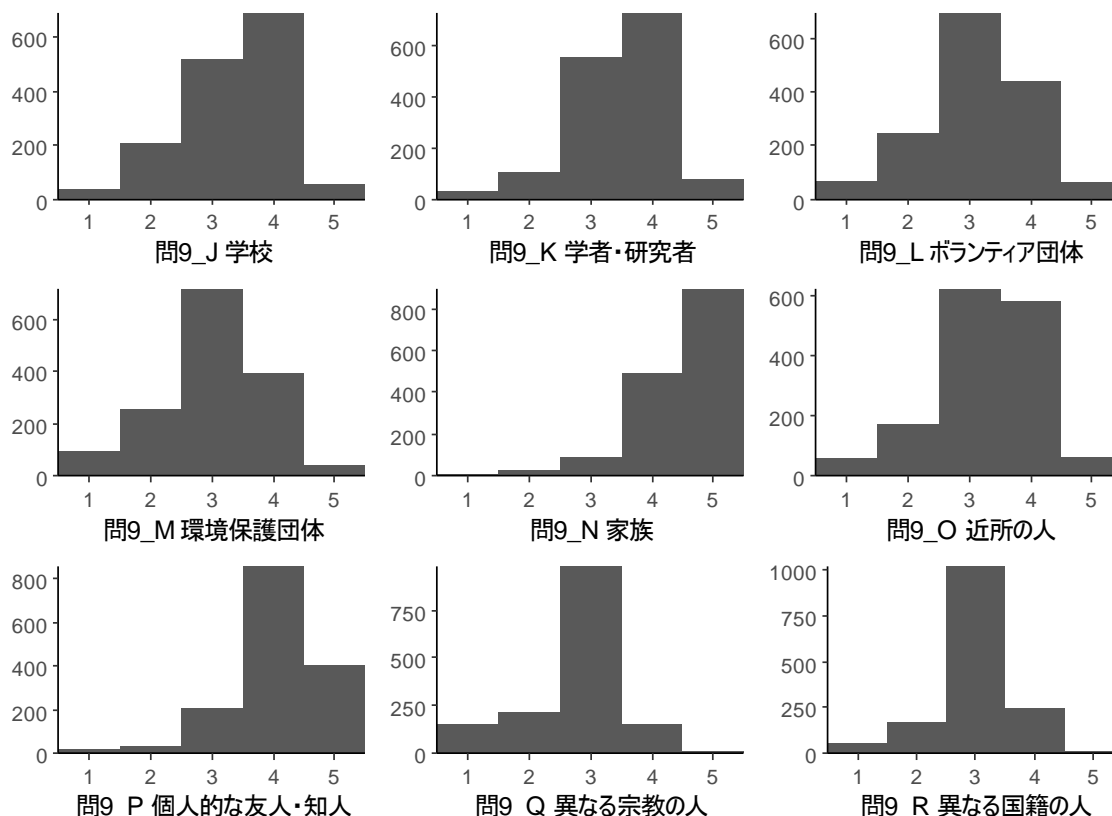


図 9. 信頼感の分布 (2)

図 9 は信頼感の後半部分のグラフである。J\_学校と K\_学者・研究者に対する信頼感も比較的高く、ある程度信頼している人が 45% 越えと、最も多い点も同じである。平均値は J\_学校が 3.34、K\_学者・研究者が 3.48 である。L\_ボランティア団体については比較的正規分布に近く、平均値は 3.12 である。M\_環境保護団体はボランティア団体と平均値は似ている (3.02) が、さらに 3 (どちらともいえない) に回答が集中する形になっている。N\_家族は圧倒的に信頼感が高く、とても信頼している人が 60% 近くに迫る。平均値で見ても 4.49 と極めて高い値になっている。O\_近所の人については 3 と 4 に回答が集中している。平均値は 3.28 である。P\_個人的な友人・知人も家族ほどではないが、多くの人に信頼されている。ある程度信頼している人が最も多く、次に多いのはとても信頼していると答えた人で、両者を合わせると 80% を越える。平均値も 4.06 となっている。Q\_異なる宗教の人と R\_異なる国籍の人については中間回答がかなり多い。両方とも 60% 以上が 3 (どちらともいえない) と回答しており、平均値をみてもそれぞれ 2.76 と 3.00 である。

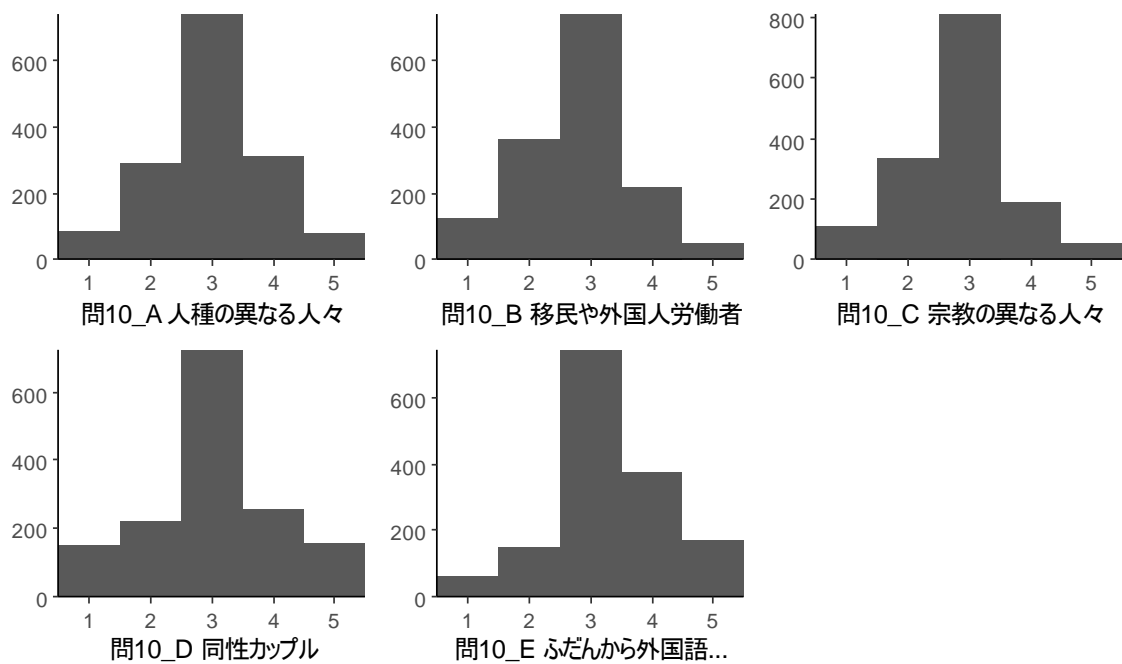


図 10. 寛容性の分布

問 10 では寛容性についての項目が質問されている。A～D に示されるような人が近所に増えることについて、5（賛成）、4（どちらかといえば賛成）、3（どちらともいえない）、2（どちらかといえば反対）、1（反対）の 5 段階で回答を求めている。A では人種の異なる人々が示された。回答分布はきわめて正確に左右対称の分布になっており、3（どちらともいえない）が半数近くを占めている。平均値もほぼ中間の 3.01 である。B の移民や外国人労働者についても中間回答が約半数と多いことには変わらないが、A に比べるとどちらかといえば反対の人が多し。平均値も 2.80 と中間よりやや反対側に寄っている。C では宗教の異なる人々を提示している。これは B の移民や外国人労働者に似た分布を示し、平均値も 2.82 とほぼ同じである。D は少し趣向の異なる同性カップルについてである。これもやはり 3（どちらともいえない）に半数近くの回答が集中しており、その他の分布は A 同様の左右対称である。平均値も 3.04 とほぼ中間である。E はふだんから外国語を話す人々である。中間回答が多数を占める点は変わらないが、B や C とは異なり、反対派が少なく賛成派が多いという結果になった。平均値も 3.29 とやや賛成寄りになっている。この問 10 においてはどの項目においても 3（どちらともいえない）という回答が多く、一貫して賛否を保留する傾向があることが確認できた。（図 10）

次の問 11 では政党や国家に対する好感度を質問している。幸福感などと同様に 0～10 の 11 段階で回答を求めており、0 がとても強い反感、10 がとても強い好感を意味している。前半の A～I においては 2018 年 12 月時点で、日本において政党要件を満たしていた政党を対象として取り上げた。どの政党に対してもちょうど中間を意味する 5 を選ぶ人が圧倒的に多く、特別な好感も反感も持っていない人が 30% 台後半から 40% 台後半を占めていた。特定の支持政党を持たない、いわゆる無党派層の多さが反映されている。中間回答以外は多くの政党において、好感を持つ人が少なく、反感を持つ人の方が多くなっている。平均値で見ても、B\_立憲民主党が 4.13、C\_国民

主党が 3.92、D\_公明党が 3.78、E\_日本共産党が 3.59、F\_日本維新の会が 4.16、G\_希望の党が 3.78、H\_自由党が 3.79、社会民主党（社民党）が 3.73 となっている。唯一異なるのは自由民主党（自民党）であり、好感と反感が量的に拮抗しており、平均値は 4.78 と他に比べるとやや高い（図 11）。

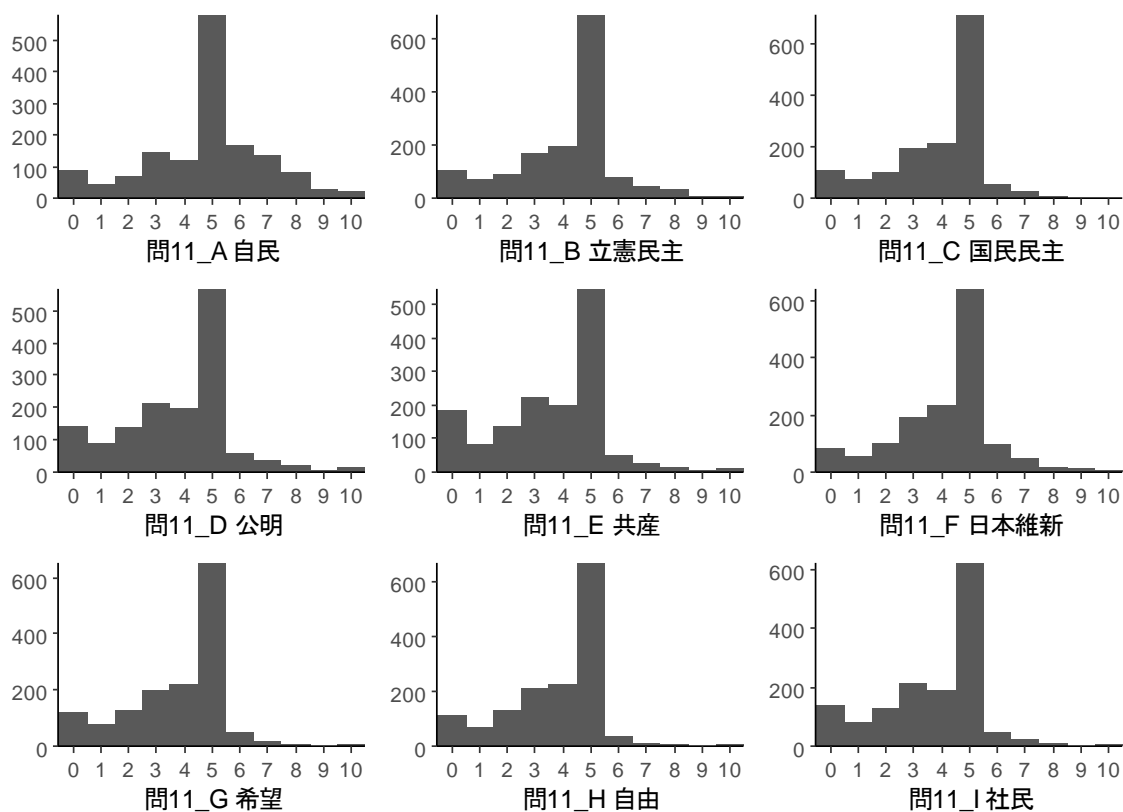


図 11. 好感度の分布（政党）

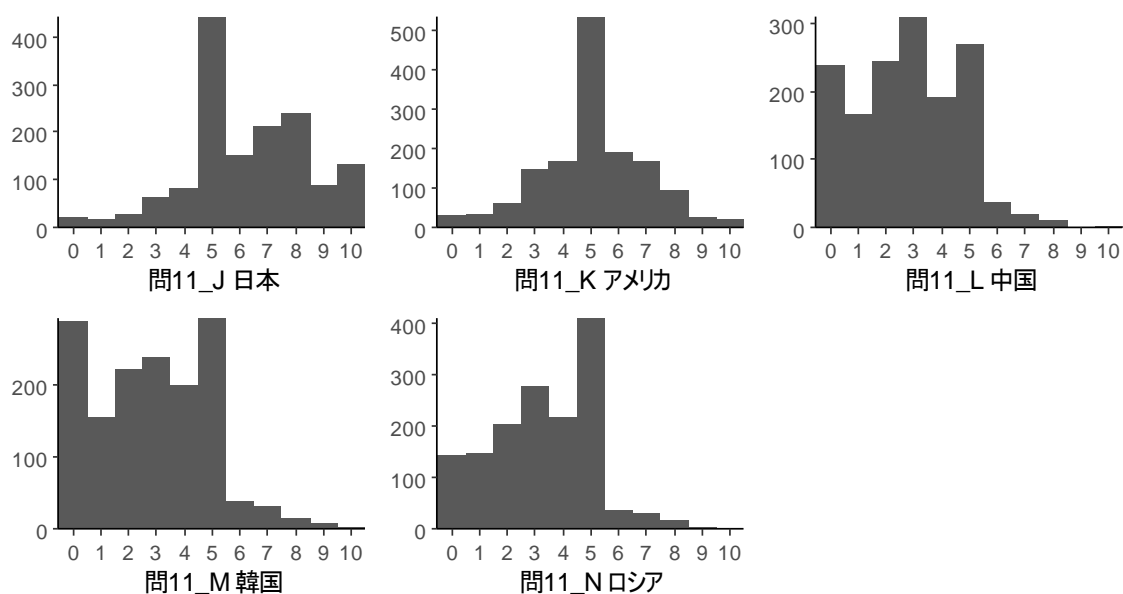


図 12. 好感度の分布（国家）

後半のJ~Nでは日本及び比較的身近な国々を対象にしている。やはり、どの国に対する好感度においても中間回答は多いが、全体の分布としては大きく異なる。J\_日本に対する好感度は総じて高い人が多く、平均値は6.25になっている。K\_アメリカに対する好感度の分布はほぼ左右対象であり、平均値も5.06とほぼ中間である。それに対してL\_中国とM\_韓国に対する好感度は極めて低く、90%以上の人が5以下の回答をしている。平均値で見ても、中国が2.80、韓国が2.84と日米に比べると極端に低い。N\_ロシアに対する好感度も比較的低いですが、中国・韓国ほどではない。こちらでも5以下の回答が90%以上を占めるものの、中韓に比べると1や2といった強い反感を示す回答は少ないため、平均値を見ると3.29と幾分高い値であった(図12)。

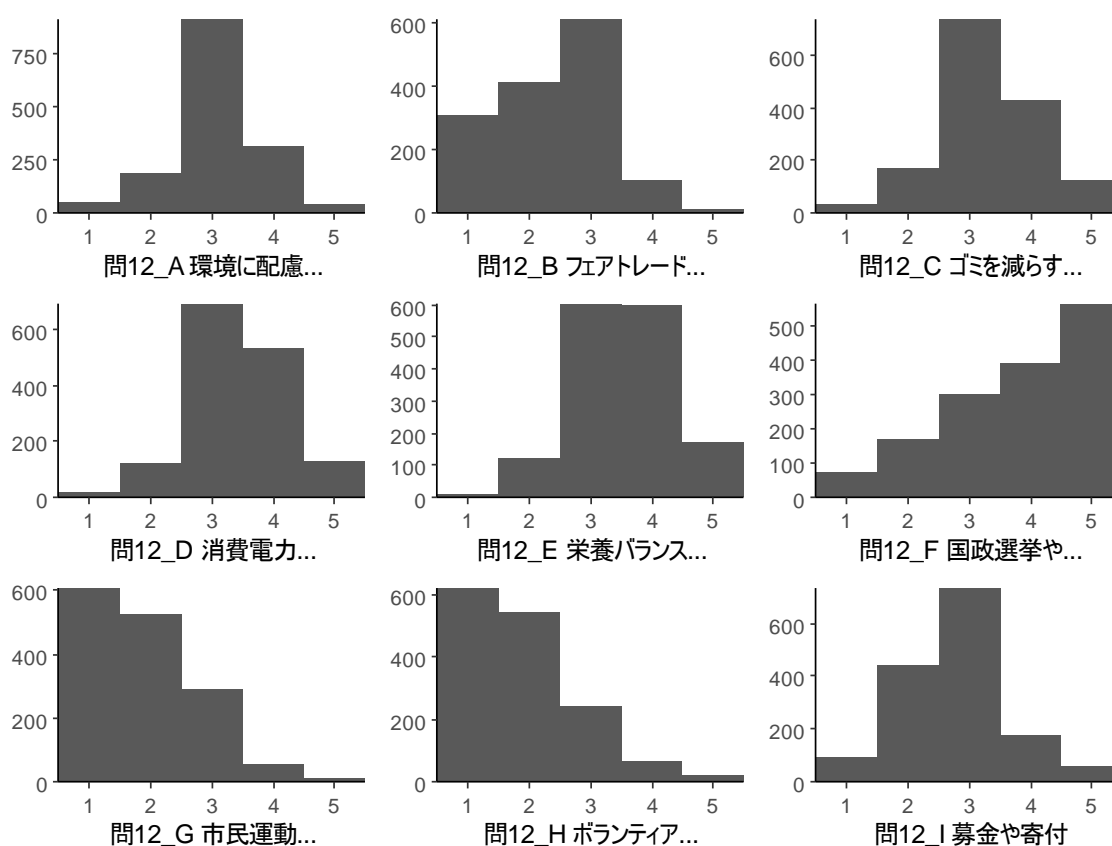


図13. 環境保護・健康維持・社会的行動の分布

問12で質問されているのは、環境や健康に関する行動と社会参加活動を行う頻度である。これらの項目も5段階のスケールになっており、5(いつもしている)、4(よくしている)、3(ときどきしている)、2(めったにしない)、1(したことがない)の選択肢から回答を選ぶように設計されている。A\_環境に配慮した商品の利用頻度は左右対称に近い分布で、3(ときどきしている)という回答が60%以上を占めている。平均値も3.07と非常に中間に近い。B\_フェアトレード商品の利用頻度は、中間回答が40%強と最も多いものの、1(したことがない)や2(めったにしない)を選択する人も比較的多く、平均値は2.38であった。C\_できるだけゴミを減らす工夫をする頻度の分布も、も比較的正規分布に近いがAに比べると4(よくしている)という回答が多く、Aや

Bに比べると比較的身近な行動であることを示している。平均値も3.30と中間より少し高い値であった。D\_消費電力を減らす工夫についてはさらに頻度が高く、平均値は3.41である。ゴミを減らすことよりも、消費電力を減らすことの方が、自身の利益に直結するためではないかと考えられる。E\_栄養バランスのとれた食事という健康に関する行動については、3と4の回答比率がともに約40%と拮抗している。平均値も3.53とDよりもさらに高い。Fでは国政選挙や自治体選挙の際の投票頻度を質問している。これはいつも投票している人が最も多く、投票したことがない人が最も少ない階段状の分布になっている。5（いつもしている）を選んだ人が35%以上、4（よくしている）を選んだ人が25%以上で、この2カテゴリをあわせると60%以上になる。直近の第48回衆議院議員選挙（2017年10月22日）における投票率が53.68%（総務省）であったことを鑑みると、ややこのサンプルは選挙によく行く層に偏っている可能性がある。G\_市民運動への参加頻度とH\_ボランティア、NPO、NGO活動への参加頻度は低く、平均値は1.89と1.88、1（したことがない）という回答が共に40%を越えていた。Iの募金や寄付を行う頻度は比較的正規分布に近い。中間回答が約半数を占め、平均値は2.79であった。

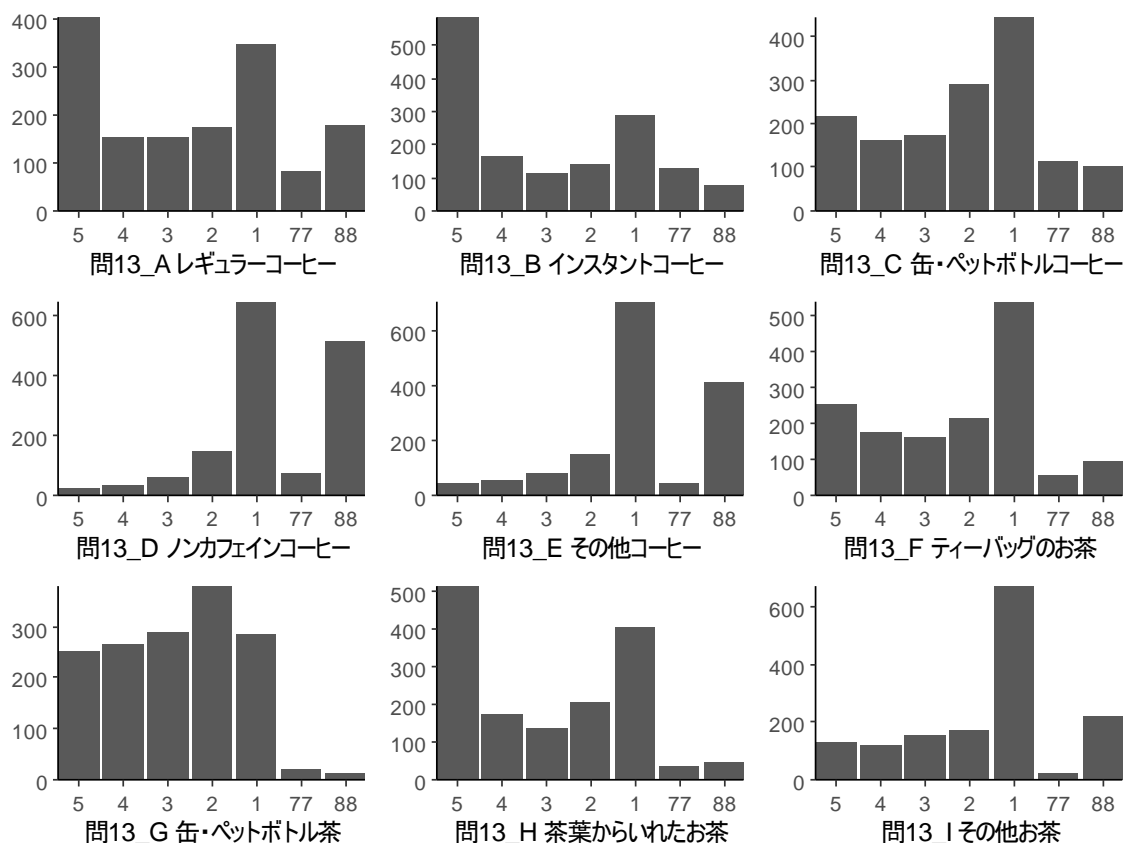


図 14. コーヒー・お茶の摂取頻度分布

問13から問16までは嗜好品をはじめとする様々な飲食物の摂取頻度についての質問が続く。どの項目においても、5がほぼ毎日、4が週に二、三日、3がほぼ週に一日、2がほぼ月に一日摂取することを意味し、1はそれ以下の頻度でしか摂取しないことを意味している。この他に77（以前は摂取していたが今はやめている）と88（これまで摂取したことがない）という現在摂取して

いないことを意味するカテゴリがある。問 13 は様々なコーヒーやお茶に関する質問である（図 14）。A\_レギュラーコーヒーは現在摂取していない人が 20%弱いるが、その一方でほぼ毎日摂取している人が 30%弱いることが確認されている。また、月一日以下でしか飲まない人も 20%以上存在し、幅広い回答が見られている。それに比べて B\_インスタントコーヒーはほぼ毎日飲む人が約 40%を占める多数派になっている。C\_缶やペットボトルのコーヒーについては、月一日以下しか飲まない人が約 30%と最も多いが、ほぼ毎日飲む人からほぼ月に一日飲む人まで幅広い回答が一定数確認できる。カフェインを取りたくない人が、コーヒーの代替品として利用できるノンカフェインのコーヒー風飲料（タンポポコーヒーなど）を飲む頻度が D で質問されている。これは月一日以下しか飲まない人が 40%以上、飲んだことがない人が 30%以上とそれほど多くの人には飲まれていない様子が見える。E としてその他のコーヒーも質問しているが、多くは月一日以下の頻度か飲んだことがないという人であった。

F からはお茶に移る。ここでのお茶は日本茶だけでなく紅茶や烏龍茶、ハーブティーなども広く含んでいる。F\_ティーバッグでいれたお茶はほぼ毎日～ほぼ月に一日までの各カテゴリに 10%以上の回答が見られるが、月一日以下でしか飲まない人が 35%を越える多数派である一方、現在飲んでいない人は少なかった。G\_缶やペットボトルのお茶については F よりも現在飲んでいない人は少なく、ほぼ毎日～月に一日以下の人までどのカテゴリにも 15%以上の回答があった。飲む頻度は様々だが、現在飲んでいない人が少ないことから、缶やペットボトルのお茶が多くの人に受容されていることが分かる。最も伝統的な、茶葉からいれたお茶を飲む頻度は H で質問されている。現在飲んでいないという人が少ない点は、缶やペットボトルのお茶と同じだが、ほぼ毎日飲んでいる人と、月に一日以下しか飲まない人に二極化する傾向がある。ほぼ毎日飲む人が 30%以上、月一日以下しか飲まない人が 25%以上いるのに対し、ほぼ週に一日飲む人は 10%に満たない。I ではその他のお茶についても質問している。これについては月一日以下の頻度でしか飲まない人が 45%以上を占める多数派になっている。

問 14 では必ずしも嗜好品ではないものも含め、様々な飲食物の摂取頻度を質問している（図 15）。A\_特定保健用食品はほぼ月に一日かそれ以下の人が、及び利用したことがない人を合わせると 70%以上になり、それほど広く利用されているわけではないことが分かる。B はカップ麺、インスタント麺の利用頻度である。利用したことがない人はほとんどいない一方で、ほぼ毎日との回答もほとんど見られない。ほぼ週に一日～月に一日以下までの範囲に多くが分布している。C\_無農薬や有機栽培の野菜については月に一日以下の人が約 40%と多数を占めるが、それ以上の頻度で利用する人も一定数見られる。また、一度は利用したことがあるものの現在はやめたという人がほとんど見られないことも特徴の一つだろう。

D ではノンアルコールビールなどのお酒風味のノンアルコール飲料について質問している。お酒が飲めない場面などで主に活用される、お酒の代替品であるが、利用頻度は月に一日以下という人が半数以上を占めている。また、利用したことがないという人も 20%以上いることが確認された。E\_コーラなどの炭酸飲料や清涼飲料水についてはほぼ月に一日かそれより低い頻度の人が 30%前後と多いが、週に二、三日やほぼ週に一日という回答もそれぞれ 10%以上は存在している。F では E のような炭酸飲料・清涼飲料水の内、糖質やカロリーを抑えた商品の利用状況について尋ねている。E に比べると全体的に頻度が低くなり、月に一日よりも少ない頻度の人が 40%以上

を占める分布になっている。G\_サプリメントの利用頻度は大きく3極に分かれる。最大派閥は月に一日よりも少ない頻度の人で30%強、他に多いのは利用したことがないという人とほぼ毎日利用する人で、共に20%強である。

H\_外食サービスは利用していない人は少なく、利用している人の中で頻度はほぼ月に一日とほぼ週に一日が多い山形の分布をしている。それぞれ35%弱と30%弱の人が選択している。同じく食事に関する項目で、I\_スーパーやコンビニの弁当、総菜の利用頻度も外食サービスに比較的近い分布になっており、ほぼ月に一日とほぼ週に一日が共に約30%と多くの回答を集めている。残る2項目は菓子に関する項目である。J\_洋菓子(ケーキ、チョコレート、アイスクリーム、クッキーなど)は食べる頻度が高い人が多く、逆に現在利用していない人はほとんどいない。特に多くの回答が集中しているカテゴリは週に二、三日とほぼ週に一日であり、共に比率は20%台後半である。それに比べるとK\_和菓子は少し摂取頻度が低く、特に洋菓子に比べるとほぼ毎日、又は週に二、三日という回答が少ない。逆に、ほぼ月に一日とそれ以下の人が洋菓子よりも多い。

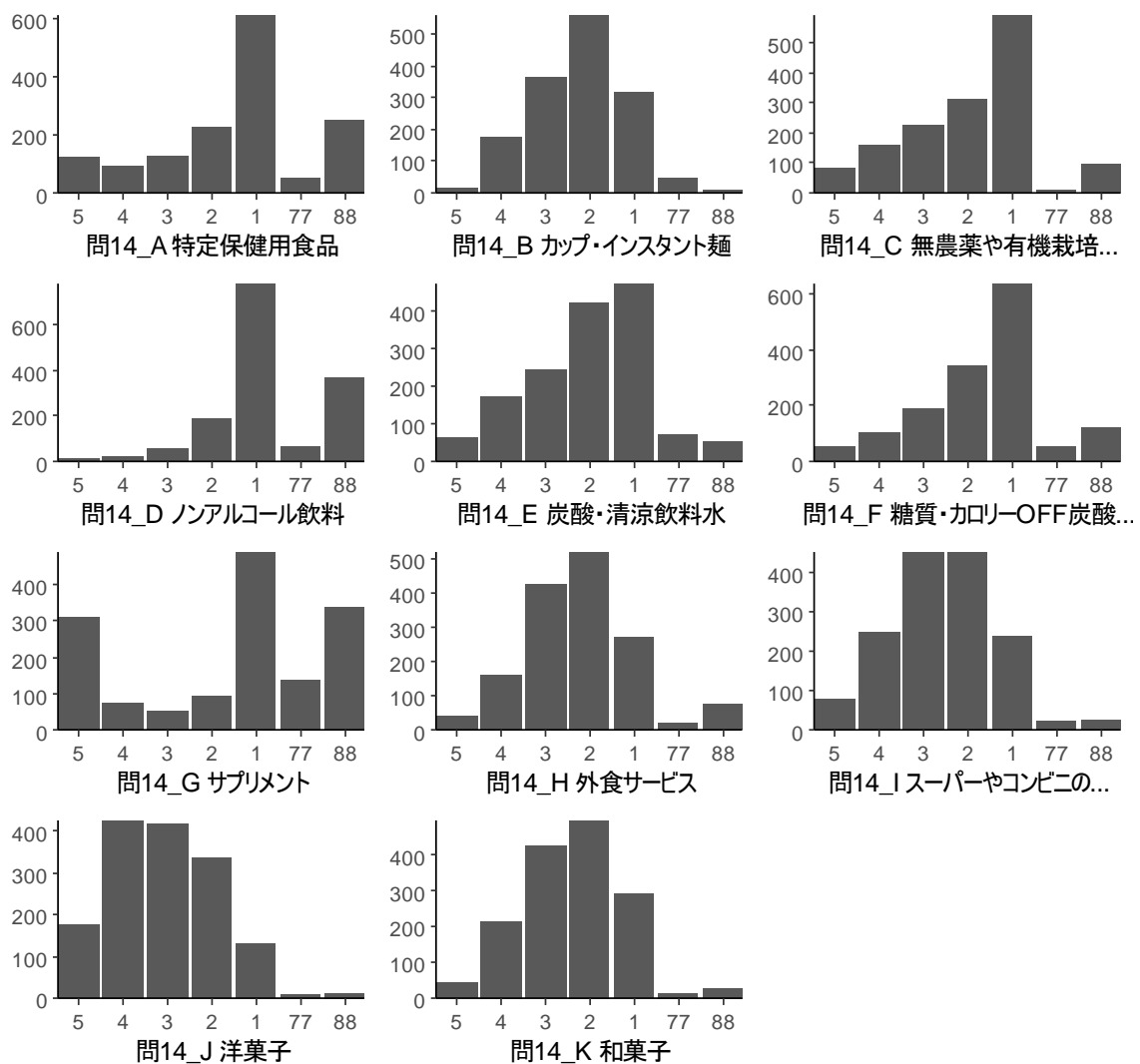


図 15. 飲食物・サプリメントなどの摂取頻度分布

嗜好品の一つであるお酒は問15で質問されている。A\_ビールからG\_糖質やカロリーを抑えたアルコール飲料までの7種類及びH\_その他のお酒について飲む頻度を尋ねているが、どの項目においても基本的な分布の形状に違いはない。どの種類であっても、30~50%程度の人には月に一日よりも低い頻度でしかそのお酒を飲んでいない。比較的高い頻度で飲まれているのはA\_ビールとB\_発泡酒、そしてF\_焼酎・酎ハイの3種類で、どれもほぼ毎日飲む人が10%よりも少し少ない程度である。そして、コーヒーやお茶との違いは、昔は飲んでいたが今はやめたという人や、そもそも飲んだことがないという人が比較的多い点にある。D\_ウイスキー・ブランデーやG\_糖質やカロリーを抑えたアルコール飲料については、30%弱の人が飲んだことがないと回答している（図16）。

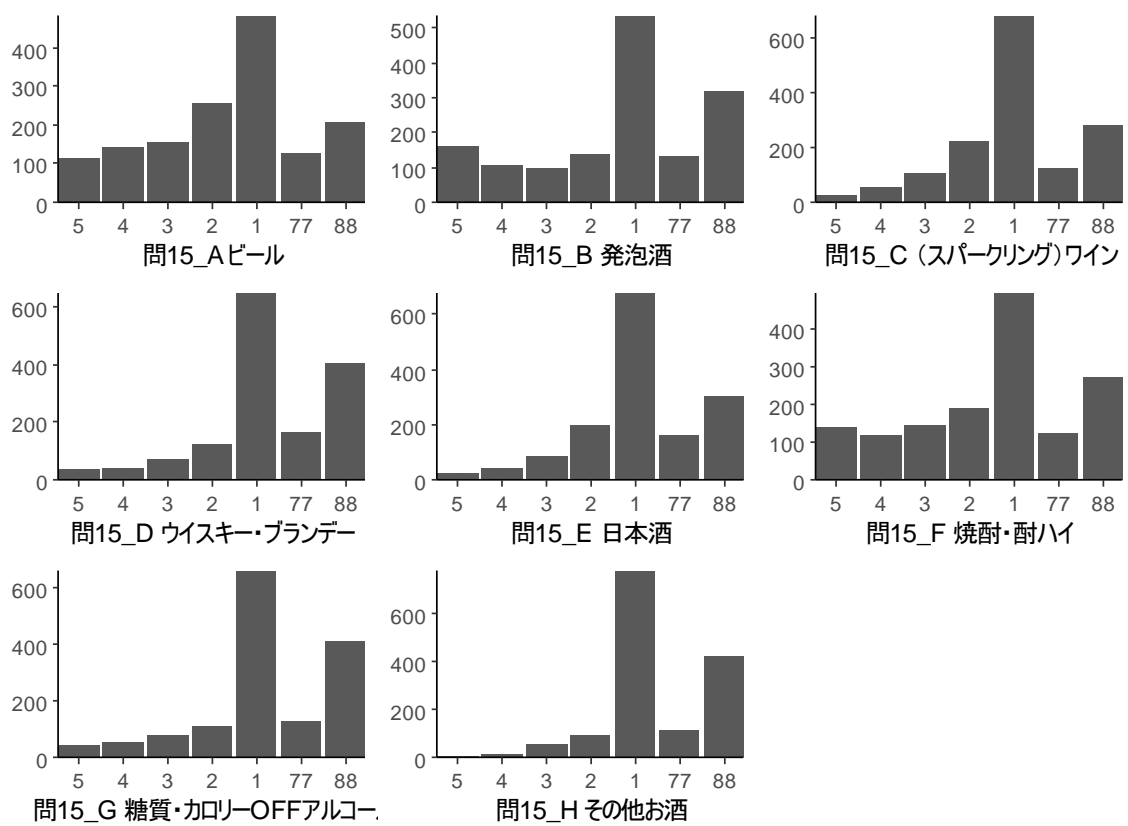


図16. お酒の摂取頻度分布

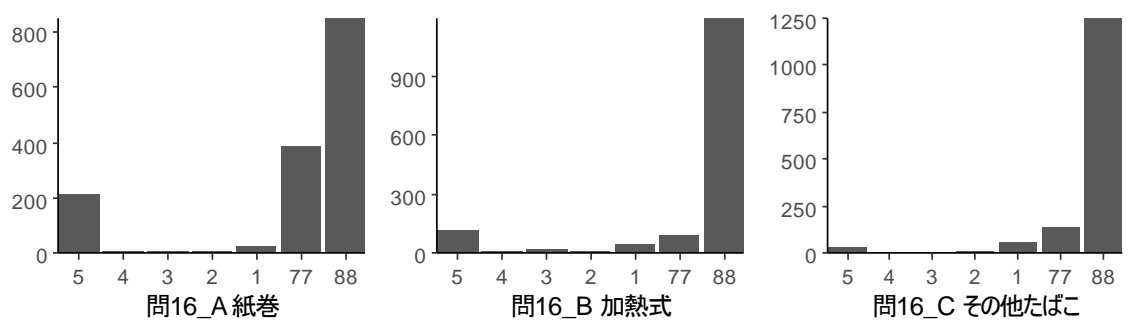


図17. たばこ摂取頻度分布



問 16 はたばこについてである。A\_紙巻きたばこ、近年新たな商品カテゴリとして登場した B\_加熱式たばこ、そして C\_その他のたばこについて、他の嗜好品同様に摂取頻度を質問している。たばこに関してはどの種類においても吸ったことがない人が圧倒的多数である。A\_紙巻きたばこにおいては 60%弱、残る 2 種類に至っては 80%以上の人が吸ったことがないと回答している。また、A\_紙巻きたばこに関しては、以前吸っていたが今はやめている人が 25%程度見られる点が他の 2 種類とは異なっている。相対的に少数の、現在たばこを吸っている人においてはたばこという嗜好品の特性上、ほぼ毎日吸う人がほとんどで、ほぼ週に一日のような中途半端な回答はほとんど見られない (図 17)。

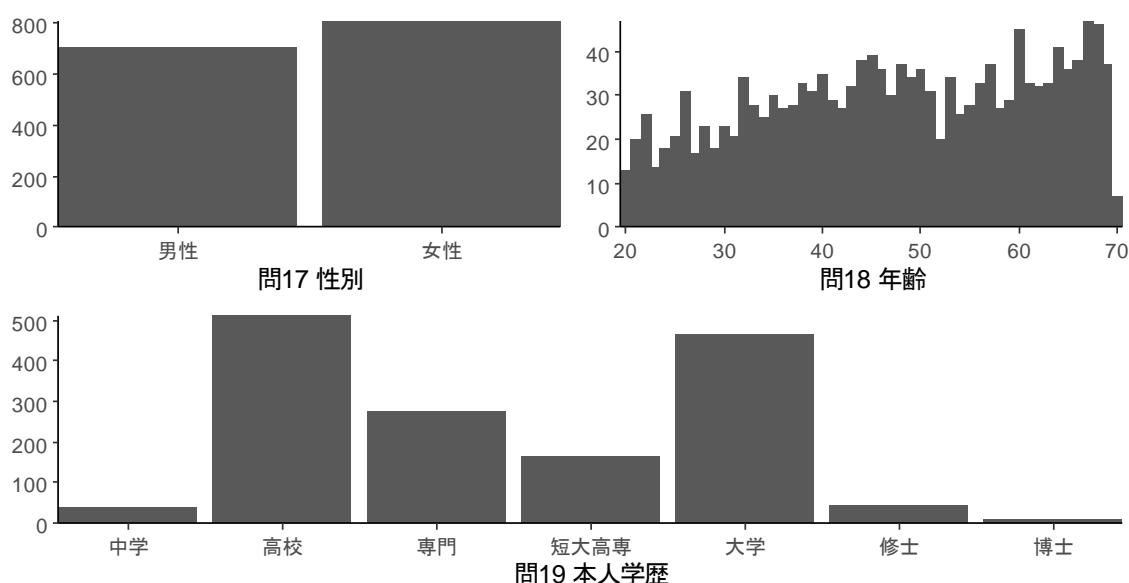


図 18. 性別・年齢・本人学歴の分布

問 17 以降は本人の属性や、社会経済的地位、家族に関する質問が続く。問 17 は性別で、男性が 46.6%、女性が 53.4%である。問 18 は年齢で、本調査の対象である 20~69 歳がほとんどであるが、一部の対象者についてはサンプル抽出後に誕生日を迎えているため 70 歳の対象者がわずかに含まれる。平均年齢は 47.35 歳である。本人の最終学歴については問 19 の学歴をリコードし、大学は文理を問わず「大学」として扱っている。高卒と大卒が 30%程度で最も多く、その次に多いのが専門学校卒で 20%弱であった (図 18)。

問 20 の従業上の地位については、正規雇用者を意味する常時雇用されている一般従業員が 40%弱を占め、圧倒的多数派であった。また多くの助成が含まれているとみられる臨時雇用、パート、アルバイトが 20%弱、家事専業の人が 10%程度と比較的多かった。また、問 22 の自由記述による職業を基に無職を含めると 9 カテゴリからなる SSM 職業分類と、職業威信スコアを作成した。職業威信スコアは 1995 年版をベースに 700 番台と 800 番台が加えられたものを利用した。SSM 職業分類については管理職と農林業が極めて少なく、逆に無職と事務職が共に 20%を越えて多かった。その他のカテゴリはどれも 10%前後の割合で分布していた。職業威信スコアは最小値が 26.7、

最大値が 83.5 であり、平均値は 44.81、標準偏差は 11.35 である。グラフでも明らかな最頻値が見られるが、これは「総務・企画事務員」および「その他の一般事務員」であり、職業威信スコアは 51.6 である（図 19）。

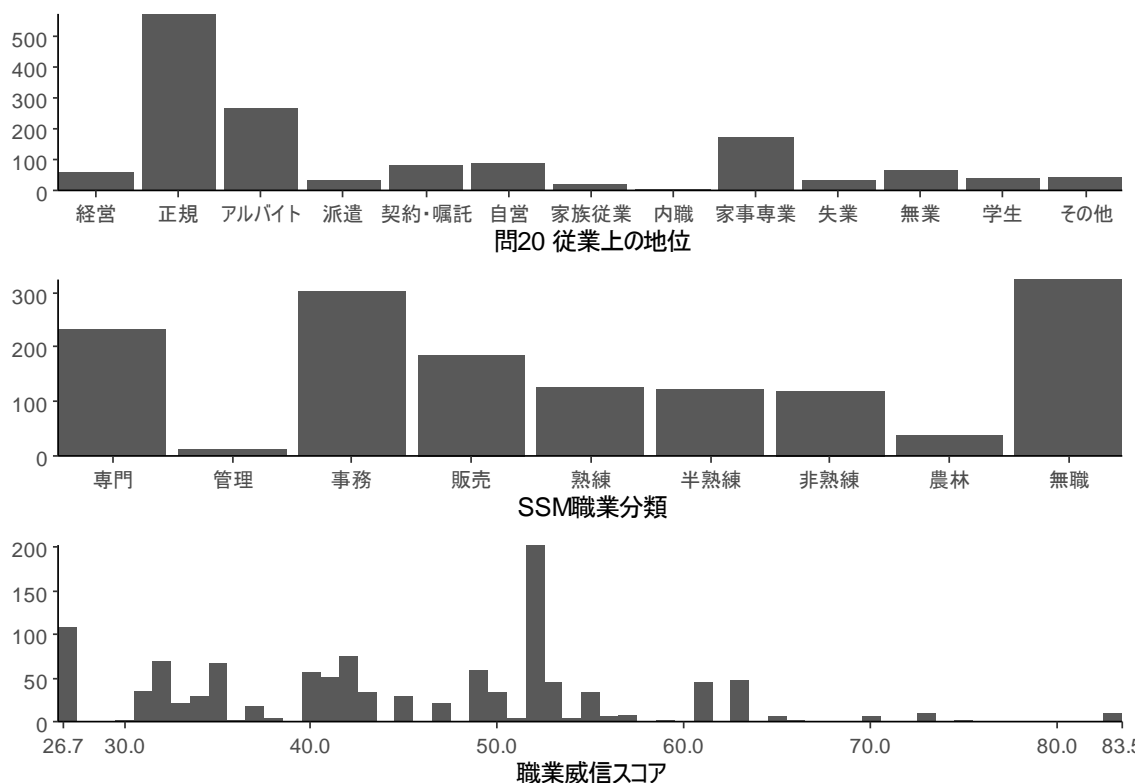


図 19. 職業変数の分布 (1)

問 23～26 については有職者にのみ、労働時間や日数、勤め先の従業員数、現在の役職、勤続年数について質問している（図 20）。問 23 が労働時間や日数を質問する項目で、それぞれ 1 日当たりの労働時間と、1 週当たりの労働日数を尋ねている。1 日当たりの労働時間が 24 時間を超えているケースや、1 週当たりの労働日数が 7 日を超えているケースについては、1 週当たりや 1 ヶ月当たりと誤認していると明らかに判断できる場合はそれぞれリコードし、判断がつかない場合は欠損値として扱った。夜勤等の勤務形態を考慮し、労働日数との関係で不自然にならない範囲（週 2 日勤務、1 日当たり 24 時間など）の場合においては 1 日当たりの労働時間が 24 時間に近いものも許容している。問 23\_a 労働時間については平均値が 7.935 であり、8 時間というケースが最も多かった。問 23\_b 労働日数については平均値が 4.907 であった。これも週に 5 日労働という人が圧倒的に多かった。問 24 の企業規模は 1 が 1 人（自分のみ）で値が大きくなるほど会社全体での従業員数が多くなるように設計されている。9 が 1,000 人以上の従業員がいることを意味し、10 は官公庁で勤務していることを意味する。従業員 1,000 人以上と 30～99 人が共に 20%弱で最も多く、次に 10～29 人という規模が約 15%で比較的多かった。問 25 の役職については、1 が役職無し、2 が監督、職長、班長、組長といった小規模なチームのリーダーを意味し、3 は係長程度、4 は課長程度、5 は部長程度、6 は社長や役員、7 はこれらの範疇に含まれないその他の役職である。

回答者の 71%以上が役職無しであることが確認できる。問 26 の勤続年数は最長で 50 年という回答が確認されているが、平均は 12.6 年であった。

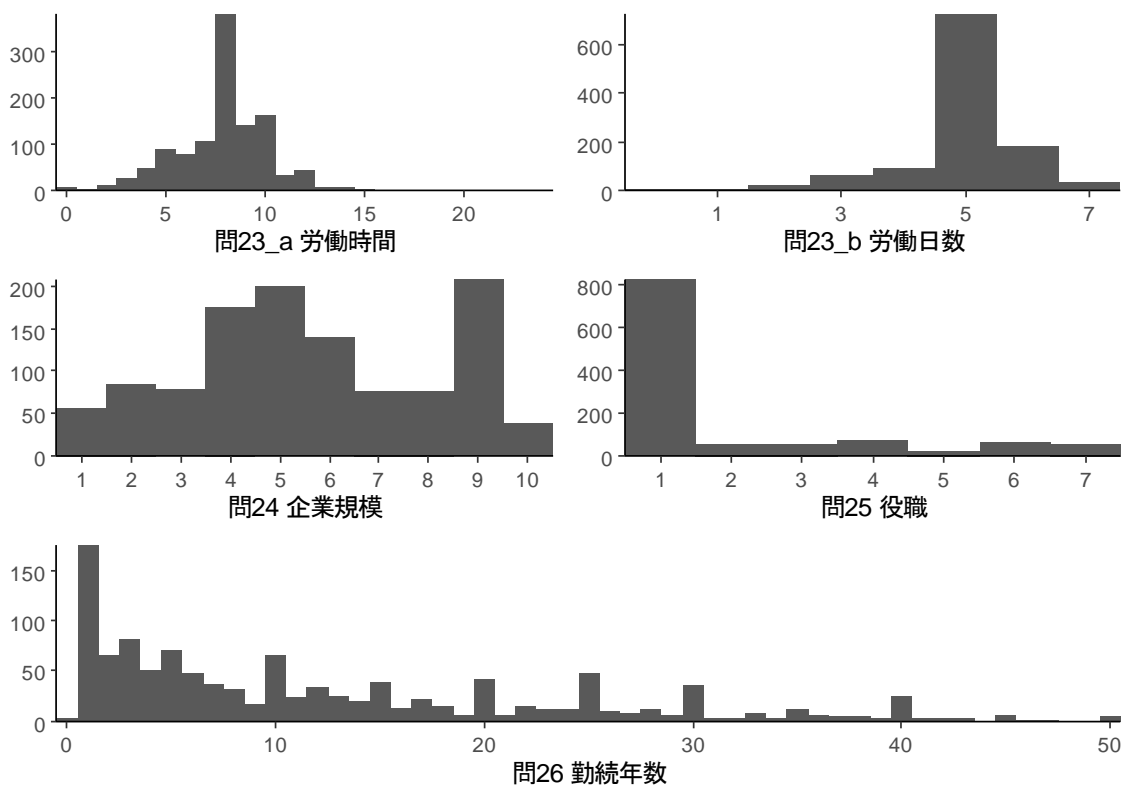


図 20. 職業変数の分布 (2)

問 27 からは再びすべての回答者を対象とした質問になっている。問 27 は離職経験を聞くもので、0 回から 3 回以上までどれも 20%以上の回答があり、ほぼ均等に分散していることが分かる。問 28 は学卒後に 3 か月以上の失業・職探しの期間を経験したかを質問したもので、経験のない人が 40%強、経験のある人が 55%程度であった (図 21)。

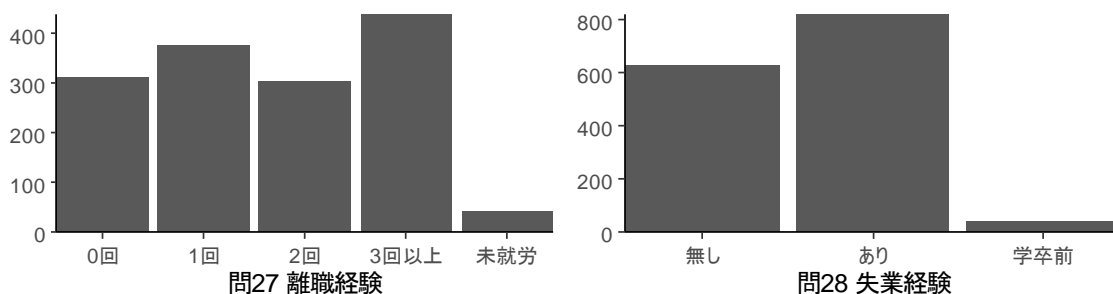


図 21. 離職・失業経験の分布

問 29 では婚姻状態を尋ねている。既婚者が約 70%、未婚者が約 20%、離死別はわずかであった。問 30 は子供の人数を尋ねている。2 人子どもがいるという人が約 35%と最も多く、次に子供

はいないという人が約 30%であった。子どもが 1 人という回答と 3 人という回答は共に約 15%であった。また 4 人以上子どもがいる人はほとんど見られなかった。問 31 では一番年下の子どもが、1「小学校入学前」か、2「小・中学生」か、3「高校以上の学生」か、4「すでに学校教育を終えている」かを質問している。これは、回答者のライフステージを明らかにする意図をもった質問である。この質問への回答は子どもがいる人に限られる。その中で最も多いのは既に子どもは学校教育を終えているという人で、子どもがいる人の内 45%を越えていた。その他は 10~20%程度の間の回答比率で、子どもの年齢が小さい人の方が多かった（図 22）。

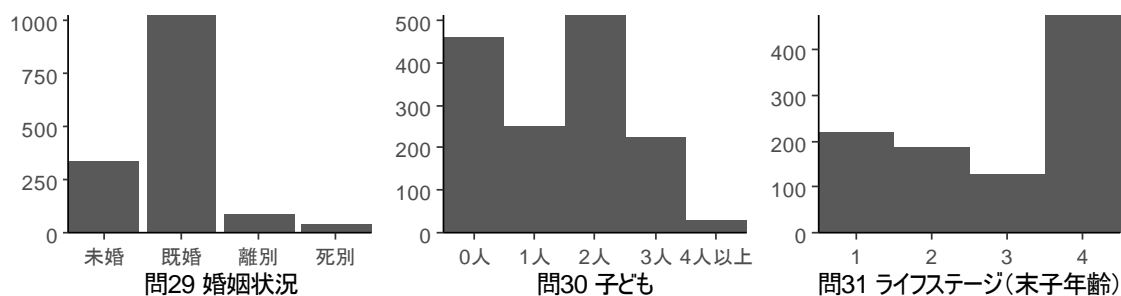


図 22. 家族変数の分布 (1)

問 32 はマルチアンサーで、どのような関係性の同居家族がいるかを質問している。最も多いのは配偶者で 65%以上の人には配偶者と同居していることが確認された。それに肉薄するように、子どもと同居している人は 50%を越えていた。これ以外では劇的に同居比率が低下する。次は両親が高いが、母で約 20%、父で約 15%に過ぎなかった。また兄弟姉妹も 10%を下回っていた。その他はどれも 5%程度までの低い確率であった（表 2）。

表 2. 家族変数の分布 (2)

		いる	いない
Q32#1	配偶者	983(66.4%)	498(33.6%)
Q32#2	子ども	750(52.6%)	675(47.4%)
Q32#3	父親	202(14.2%)	1223(85.8%)
Q32#4	母親	298(20.9%)	1127(79.1%)
Q32#5	兄弟姉妹	132(9.3%)	1293(90.7%)
Q32#6	義父	32(2.2%)	1393(97.8%)
Q32#7	義母	72(5.1%)	1353(94.9%)
Q32#8	子の配偶者	25(1.8%)	1400(98.2%)
Q32#9	祖父母	38(2.7%)	1387(97.3%)
Q32#10	孫	42(2.9%)	1383(97.1%)
Q32#11	恋人・パートナー	24(1.7%)	1401(98.3%)
Q32#12	その他	13(0.9%)	1412(99.1%)

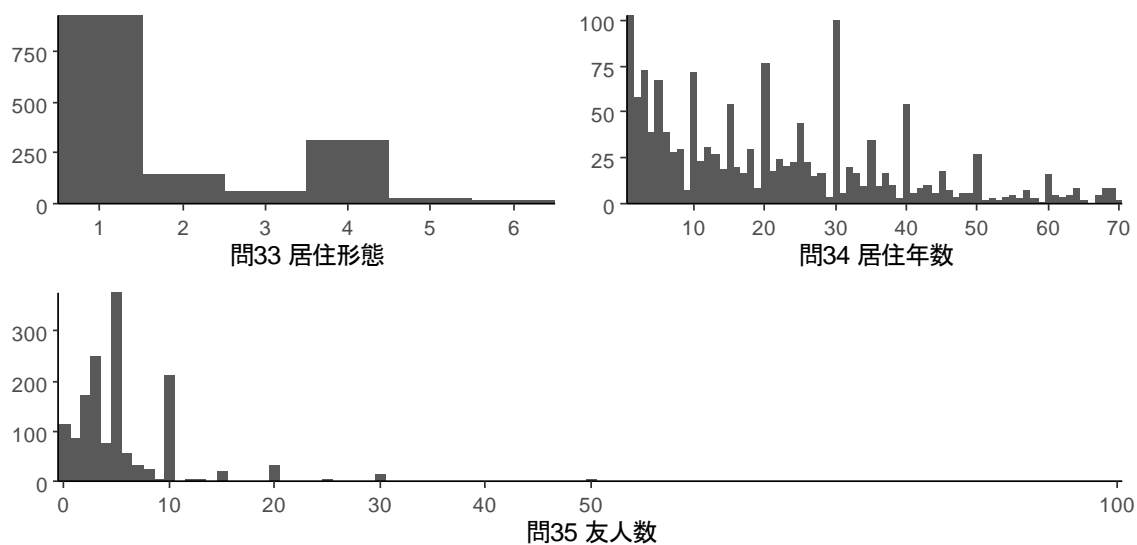


図 23. 住居・友人数の分布

問 33、34 は住まいに関する質問である。問 33 では居住形態を、問 34 では現在の居住地（小学校の校区程度）での通算居住年数を尋ねている。問 33 のそれぞれの選択肢は、1 が一戸建ての持ち家、2 が分譲マンションなどの集合住宅の持ち家、3 が賃貸の一戸建て、4 が賃貸のアパートやマンション、5 が社宅や寮、官舎、6 が上記のどれにも当てはまらないものを意味している。60% 以上の人は一戸建ての持ち家に住んでいることが確認された。そして 20% 程度が賃貸のアパートやマンションに住んでおり、その他の居住形態はどれも 10% に満たなかった。問 34 は 5 年単位や 10 年単位といった、答えやすい数値に集中する傾向はあるが、平均は 21.36 年であり、10 年以下の人が 30% を超えている。そして、20 年までに半数強、30 年以下に約 75% が含まれている。問 35 は日ごろから付き合いのある親しい友人の数を聞いている。グラフでは 30 人以下はほぼ見えないが、40 人という回答が 1 件、50 人という回答が 5 件、55 人という回答が 1 件、78 人という回答が 1 件、100 人という回答が 1 件ある。しかし多くは比較的少ない人数を回答しており、2 人以下が約 25% を占め、5 人以下が 70% 以上となっている。全ケースにおいて平均値は 5.629 人であり、ケースが極端に少なくなる 40 人以上の回答を除外しても平均値は 5.308 人であった（図 35）。

問 36 では 15 種類の職業を挙げ、家族、親戚、友人、知人の中にその職業の人がいるものをマルチアンサーで選ぶよう求めている。これは社会関係資本の測定方法の一つである、ポジションジェネレーターを作成するための項目である。また、リストにあるどの職業の人も家族、親戚、友人、知人の中にはいない、という 16 番目の選択肢も用意した。まず、どの職業の人もいないという回答が約 20% 確認された。その他の約 80% の人は 15 種類の職業の中のどれかには家族や友人などが就いているものがあるが、最も多いのは看護師で 40% 以上の方は家族や友人などの中っていると回答している。中小企業の経営者も 30% の人が家族や友人などの中っていると回答している。小学校の教員や農業従事者も 30% 弱と、比較的多くの人が知り合いにいと回答している。その一方で、自動車設計技術者が知り合いにいない人は 5% 未満であり、ウェイター・ウェイトレスと公認会計士も 10% 未満の人しか知り合いにはいないという結果であった（表 3）。

表 3. 問 36 知り合いの職業の分布

	はい	いいえ
Q36#1 自動車設計技術者	59(4.0%)	1430(96.0%)
Q36#2 中小企業の経営者	448(30.1%)	1041(69.9%)
Q36#3 自動車修理工	284(19.1%)	1205(80.9%)
Q36#4 警察官	329(22.1%)	1160(77.9%)
Q36#5 大学教授	173(11.6%)	1316(88.4%)
Q36#6 小学校の教員	411(27.6%)	1078(72.4%)
Q36#7 大工	294(19.7%)	1195(80.3%)
Q36#8 郵便配達員	151(10.1%)	1338(89.9%)
Q36#9 公認会計士	135(9.1%)	1354(90.9%)
Q36#10 医師	328(22.0%)	1161(78.0%)
Q36#11 農業従事者	415(27.9%)	1074(72.1%)
Q36#12 看護師	650(43.7%)	839(56.3%)
Q36#13 金融機関の窓口係	211(14.2%)	1278(85.8%)
Q36#14 建築士	269(18.1%)	1220(81.9%)
Q36#15 ウェイター・ウェイトレス	117(7.9%)	1372(92.1%)
Q36#16 どの職業の人もいない	287(19.3%)	1202(80.7%)

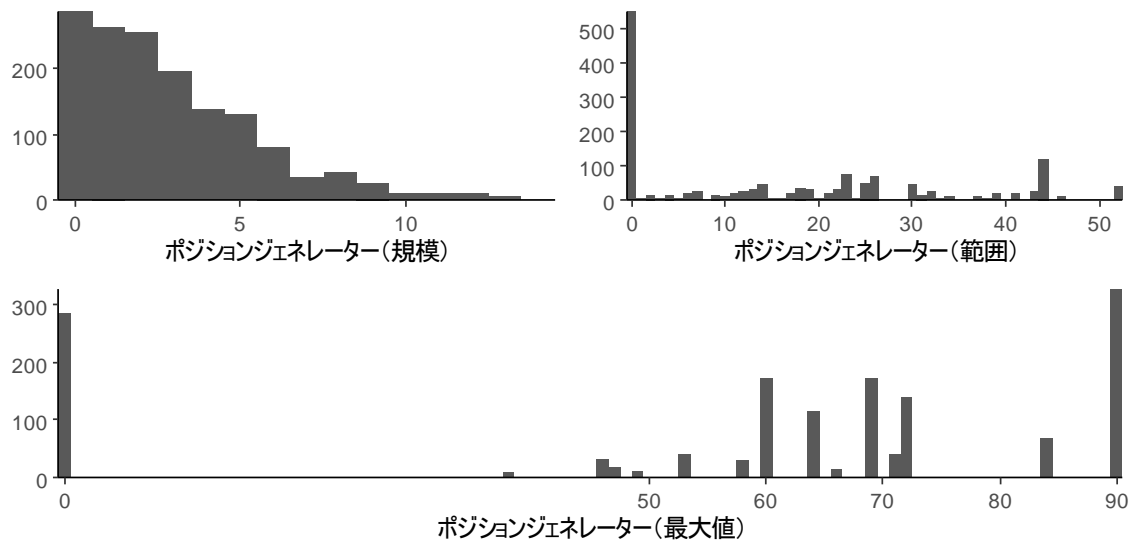


図 24. ポジションジェネレーターの分布

この問 36 を基に 3 種類のポジションジェネレーターの指標が作成された。一つ目は規模であり、15 種類の職業の内、何種類に知り合いがいると○をつけたかをカウントしている。つまり、これはどれだけ様々な職業の人が知り合いにいるかを示すものである。問 36 においてどの職業の

人もいないという選択肢を選んだ人は規模が0になる。そして最大で15である。実際このデータにおける最大値は14であった。問36で述べた通り、どの職業の人もいない、つまり規模0の人が約20%おり、規模2以下の人が過半数を占めている。そして規模5以下が85%、規模8以下が95%を占めているので、それ以上の人はほとんどいない。平均値は2.87である。

グラフは前後するが、2つ目はポジションジェネレーターの最大値である。選択肢に示した各職業に職業威信スコアを割り当て、回答者が知り合いにいと○をつけた職業のうち、最も高い職業威信スコアを得点としたものである。つまり、どれだけ威信の高い仕事に就いている人と知り合いであるかを意味している。最も職業威信スコアが高い選択肢は医師で、値は90.1である。逆に最も低い選択肢はウェイター・ウェイトレスであり、値は38.1である。知り合いにいた職業が1つのみの方はその職業の威信スコアが自動的に最大値の値になるが、それ以外の方は、複数の職業のうち、最も高い威信スコアが最大値の値となる。最大値0の方は、どの職業の人も知り合いにはいないと答えた人である。0も含めた平均値は58.03であり、0を除いた場合には71.88となる。

最後はポジションジェネレーターの範囲である。先ほどの最大値と同様に、最小値も求めることができる。そして、それぞれの最大値と最小値の差を取ったものが範囲となる。これは、どれだけ幅広い威信スコアの職業の人と知り合いであるか、つまりどれだけ幅広い階層の人と付き合いがあるかを意味している。これについては、どの職業の人も知り合いにはいない人と、知り合いにいた職業が1種類しかなかった人の両方が0を取るようになる。そして最も高い威信90.1と最も低い威信38.1の差を取った、52が範囲の最大値になる。範囲は0の人が多く、35%を超えている。そして範囲13.5以下が全体の約半数を占め、範囲26.5以下が約75%であった。0を含めて平均値は16.48で、0を除くと26.13となる(図24)。

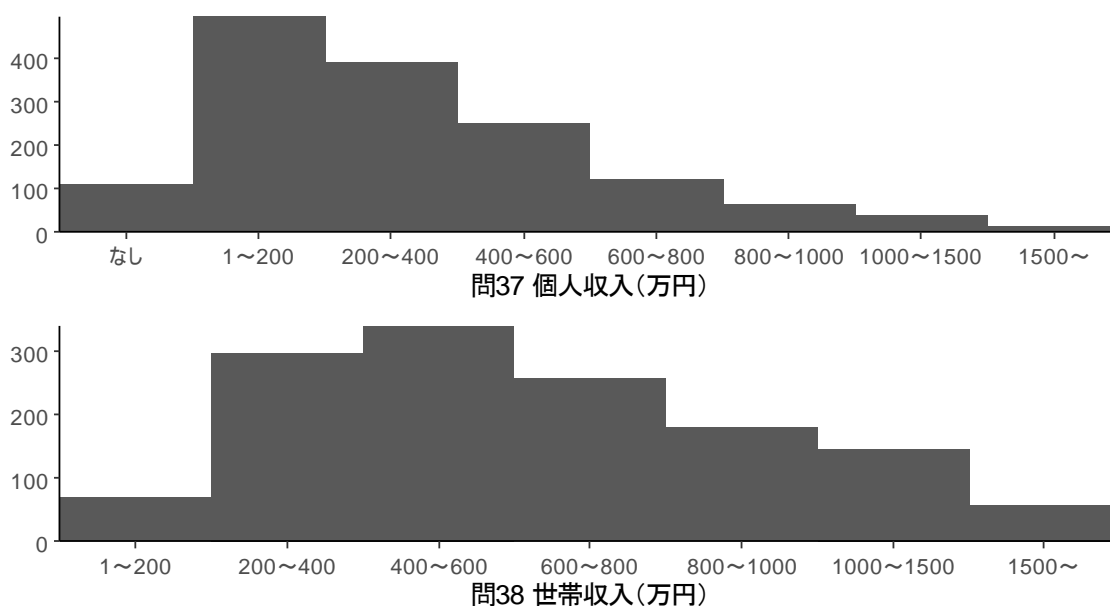


図 25. 収入の分布

最後は収入に関する項目である。問37は個人収入、問38が世帯収入である。個人収入は1万

円以上 200 万円未満の人が 30%以上で最も多く、200 万円以上 400 万円未満の人がこれに続き、約 25%と、個人収入はあるが 400 万円未満である人が全体のちょうど 60%を占めていた。逆に 1,000 万円以上の個人収入がある人は 5%に満たなかった。世帯収入はその性質上、個人収入よりも多くなり、400 万円以上 600 万円未満の世帯が約 25%で最も多かった。またその上下のカテゴリも共に約 20%と比較的多く、世帯年収 200 万円以上 800 万円以下の世帯が全体の約 65%を占めていた。

#### 文献

総務省自治行政局選挙部，2017，「平成 29 年 10 月 22 日執行 衆議院議員総選挙・最高裁判所裁判官国民審査結果調」（[http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000513918.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000513918.pdf)。）